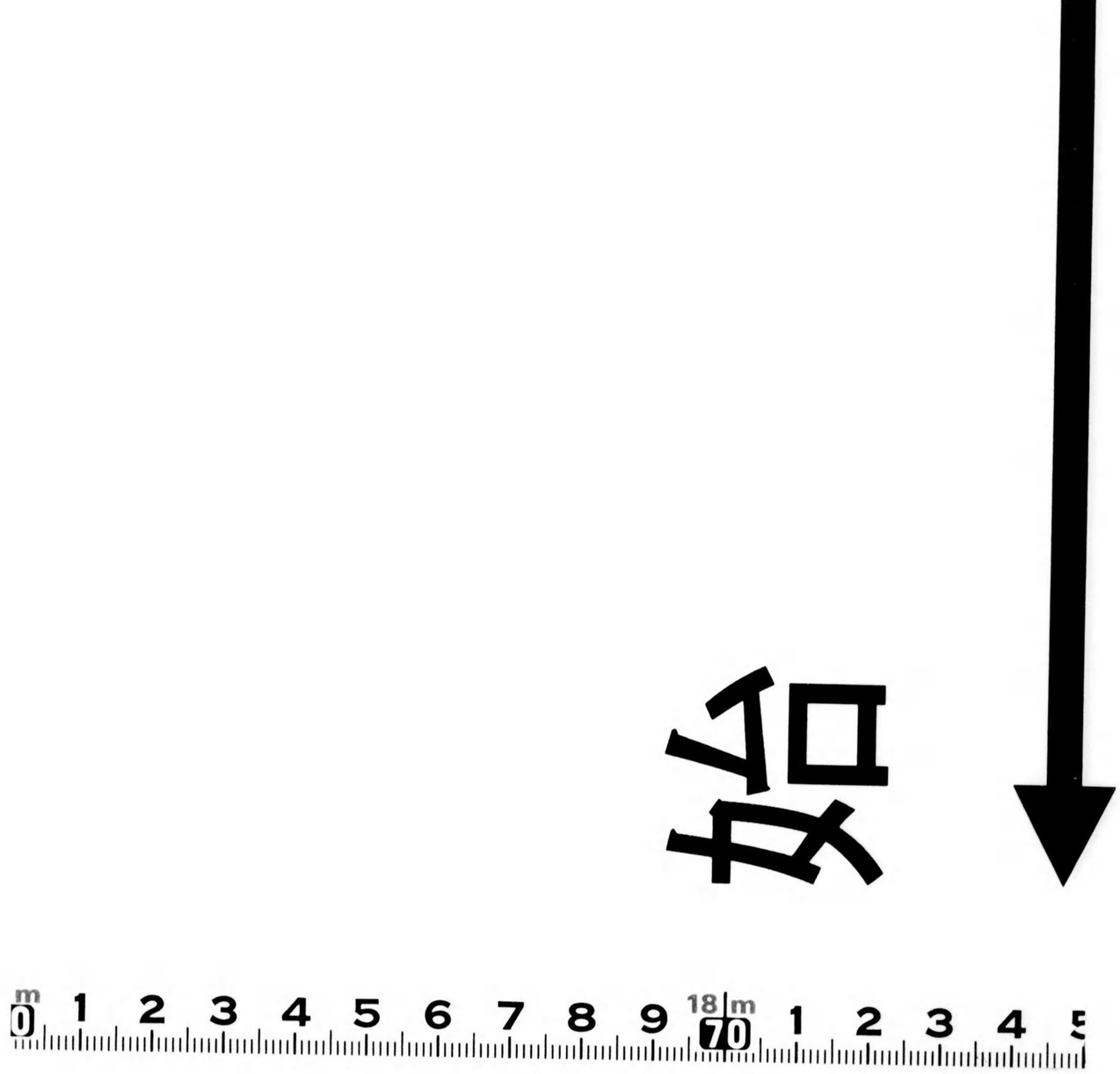

X 複写
m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 70 1 2 3 4 5

精神療法講義録

第貳輯

特104
40

精神療法講義錄

第貳輯

古屋鐵石講述

東京 精神研究會

8 1
內交

精神療法講義

第二輯目次

第七卷 精神分析合成療法……八七

第一章 精神分析合成療法とは何ぞや……八七

第二章 精神分析合成療法の原理……八九

第三章 精神分析合成療法を行ふ法……九四

第四章 精神分析合成療法の實例……九六

第八卷 擧證說得療法……一〇九

第一章 擧證說得療法とは何ぞや……一〇九

第二章 擧證說得療法を行ふ法……一一一

第三章 擧證說得療法の模範例……一一五

第九卷　心靈術療法……一二一
第一章　心靈術療法とは何ぞや……一二一
第二章　渡邊藤交式心靈術療法……一二四
第三章　古屋鐵石式心靈術療法……一二六
第十卷　心理療法……一二九
第一章　心理療法とは何ぞや……一二九
第二章　心理療法を行ふ法……一三一
第十一卷　氣合術療法……一三五
第一章　氣合術療法とは何ぞや……一三五
第二章　有心的氣合術と無心的氣合術……一四一
第三章　暗示的氣合術と心靈的氣合術……一四三
第四章　實驗的氣合術と療法的氣合術……一四四

第五章　氣合術療法を行ふ法……一四五
第十二卷　リズム療法……一四九
第一章　リズム療法とは何ぞや……一四九
第二章　リズム療法家に必須の精神統一法……一五三
第三章　リズム療法を行ふ法……一五五

目次

終

わけのぼる麓の道は多けれど
同じ高嶺の月を見るかな
心とはいかなるものと尋ねれば
墨繪にかきし松風の音

第七卷　精神分析合成療法

第一章　精神分析合成療法とは何ぞや

礦物を分析すると其礦物を構成した元素を明かにすることを得る如く、人の精神即ち心配せでもよい事を心配したり、怒らでもよい事を怒つたりする如き、精神を分析して見ると、其精神を構成するに至りし精神的の元素發見せらる、然らば其惡い精神的の元素を除き、良い精神的元素のみを化合せしめ、完全の精神とするのが精神分析合成療法である、其合成療法はフリンペッテロラ氏の創設に係る、精神分析療法に就いては趣味ある研究が數多公にせられてある。

從來の醫學ではすべての精神的疾病は、他の肉體の病氣と同じく、神經または腦髓に實質的な病的變化がある故であると思はれてゐた。併しながら今やヒステリー其他强迫觀念を伴ふ精神的疾病の原因は、過去に於ける强い

精神的外傷

ある感動が、精神上に無形の損傷を與へ、その所謂「精神的外傷」となつて殘留して居る、其れが原因となつて後年に及んで種々なる症狀を引起すものであることを發見せられた。

プロイエルの研究

プロイエル氏の研究報告に曰くあるヒステリー患者は視力に故障があつて、物が實際よりも大きく見え、また内斜視の癖を持つてゐた、その原因を分析して見ると、數年前に父が重病に罹つてその病床に侍してゐた事があつた、心細くひとり涙を浮べてゐると、突然父が、「今は何時か」と尋ねた、併し涙に曇つてよく見えないゆゑ、眼を見張り時計を眼に近づけて針を見ようとすると、その盤面が大きく見えた、これが過大視症の原因となり、其時以外父に見られまいとして、涙を押し隱さうと横目を使つたのが内斜視の原因となつたのである。

ブロイド博士の研究

この分析療法を發明したのは、今から八十年許り前に生れた、墺太利の維也納の醫師ヨゼフ、ブロイエル博士で、その門下にフロイドと云ふ博士が出てこの法を大成した。今では歐米にこの派の學者も澤山あり、療法も極めて旺に行はれてゐる。

第二章　精神分析合成療法の原理

想起不可能の精神

吾人の顯在精神に起りたる觀念は、時を經て之を再び思ひ浮べる事が容易なものもあるが、また却々困難なものもある。或は全く出來ないのもある。けれどもこの全く思ひ浮べる事の出來ない者も、催眠術に掛ると容易に思ひ出させることが出來た、或は健康の時ならば想ひ出される記憶が、ヒステリー的狀態では全く想起することが不可能となることがある、之れは吾人の種々なる觀念が顯在意識中に止まると潛在意識中に止まるとの別があるからである。

強き感動の原因

吾人が記憶を厭ふて忘れんと欲する所のものは、苦痛の觀念、不快悲哀等の經驗であつて、強き感動を精神に與へるものである併しながらたとひ其等の觀念を忘れ得たとしても、其は顯在意識から驅除しただけであつて、全然その人の精神界から消え失せたのではなく、卽ち日常の意識に反映しない

色情的障礙の原因

潜在意識中に隱れ入つたに過ぎないかゝる觀念が機會に觸れて潜在意識より脱け出でると、種々のヒステリー性症候が起るのである。

ヒステリーの原因と强迫觀念の原因

フロイド博士の研究によると、ヒステリー及び精神病中の强迫觀念は、病人の過去に於ける色情的經歷に何等かの障礙があつたのに原因すると云ふ、例へば病人が春機發動期以前に於て、異性の爲に强て生殖器を刺戟し、或は○○せられた事があると、その當時に於ては殆んど何等の害を示さなかつたとしても、精神上に殘された損傷は永く消えずして、春機發動期以後に至つて、何等かの動機によりて再び記憶に上り、その追想は現にその事件の新に發生した如く激しく精神を刺戟して種々の病症を起し、或は記憶には上らないでも、暗々の中に神經系統に作用して、病氣を起すに至るのである。そして同じく春機發動期以前の色情行爲の追想が原因であるが、ヒステリーの方はそれに關する苦悶、又は嫌惡の感動を伴つたもので、强迫觀念の方はむしろ其に滿足愉悅を感じた場合である。

病原の記憶を喚起

斯くの如く精神分析療法によつて病原たる記憶を喚起せしめると、其に伴うて病人の感情は自由に放散する、詰り外に顯はれようとして顯はれる事の出來なかつた感情が、その束縛を解かれた譯であるから、從つてそれが鬱積してゐた爲に起つた、種々の病症は消滅するに至る、恰も精神の內部の大掃除をするやうな次第で、一名清淨療法の名のある所以である。プロイエル博士は戲れに「煙突掃除」と呼んだ事もあつた。斯くて惡い精神的の元素が除かるゝとよい精神的の元素のみが化合して完全無缺の精神となるのである。

清淨療法

抑壓されし觀念

尙了解し易からしめんが爲に、重複の嫌ひあるも、精神分析療法の原理の要點を申しませう、抑壓された觀念卽ち吾人が何かしたいと思ふ、然し左樣な事はしてはならぬと考へ、一時其の欲求を抑へる、其の抑へられ壓せられた働きが吾人の生活にとつて重要な働きをするものである、譬喩を以て云へば、多人數の會してゐる場所に於て其中の一人が非常に騷がしくする、それが全體の人の妨害になる、そこで其の人を會場外へ退場させて了ふ、それは丁度何事をかしようと云ふ考へを抑壓したと同一である、退場を命ぜられ

抑壓された觀念の發散

た人が、其儘に歸つてしまつたなれば夫れ丈けのことであるが、會場外へ出ても又這入らうとする、或は戸を叩く、明けろと叫ぶ、さうなると一旦外へ出した事は出したものゝ依然として會場に這入つてゐる、人間に一種の作用をして居る、抑壓された觀念はこのやうなものである、抑壓された觀念は意識上下に這入つてしまふ、即ち夫れについて意識してゐないが、其意識してゐない所の觀念は、舞臺面に現はれぬが、色々作用をする、殊に吾人が合理的に考へて斯樣な事をやつてはならぬと斷乎たる決心を以て抑壓した場合には、左樣でもないが、或る場合にはいや〳〵ながら是を抑壓するときがある。かゝる時には抑壓されたまゝでは終らない、多少の影響がある、特に激烈な感情の起つたのを人に隱して抑壓してゐるが如き場合には、其影響は一層著しい、忘却はしてゐる、意識はしてゐないけれども、其の抑壓された觀念は、實に非常な作用をしてゐるのである。

抑壓された觀念、激して感情を興奮させた經驗は、よし其本人は意識せなくとも、全く消失せずして潛在精神となりて働き、夫れが精神上肉體上に種々の影響や障害を與へる、其抑壓されて居る精神は何であるかを分析して確め、其抑壓されし精神的の元素を發散消滅せしむるのである。而して精神分析療法に密接の關係ある、精神昇華作用と云ふ現象がある。

昇華作用

精神も物質同樣の働きをする

元來昇華作用とは、化學上の用語にして、今一物質を熱した時に、それが固體の狀態から液體とならずして、直ちに氣體となるを名づけて昇華と云ふ。個人的の性慾から來る興奮が、あまり强過ぎるときは、それが他の領域へ迸出し、適用されるやうになる、之を精神昇華作用と云ふ。

慾望や情緒的の過程は、却々執念深いもので、容易に衰へようとしない、外觀では慾望が消え去つた樣に見えても、よく調べてみると、唯其慾望の表はれる形が變じたゞけで、決して慾望の終熄したのではないことがわかる、之れは精神分析療法を應用して調べると、初めて正確に其原因を知ることを得る、之れ等の作用を昇華と云ふ、而して病氣の精神的の元素が發見せられしときは、其病的の元素を除去する法を行ひ、善良なる精神的元素のみを合成して完全の精神を作るのである、之れが即ち精神分析合成療法である。

第三章　精神分析合成療法を行ふ法

催眠術應用精神分析療法

精神的疾病の原因たる諸種の感動或は觀念は、病人の潜在意識中に隱れてゐるから、之を問ふても病人は自ら答へる事が出來ない、それで普通には催眠術を應用して深い催眠狀態となし、患者に質問して應答せしめ、過去の隱れたる病原的感動を搜索するのである、或は又催眠せしめず單に病人を平臥して眼を閉ざゝしめ、外來の刺戟を遮斷し其病氣となりたる最初の動機について思ひ浮ぶ事を語らしめる、その際はたとひ如何なる不愉快な事、云ひ難い事でも隱す所なく、云ふのが必要である事を豫めよく領解させて置かなければならない、そして一つの事が思ひ浮ぶと、それにまた續いて思ひ出す事を云はせる。さうして次々に云はせながら、遂に追想を進めることが出來なくなると、補助法として前頭壓定法を行ふ其は患者に向つて、余は是より手にて君の額を壓す、然すれば君は必ず余の求むる追想は、形をなして君の眼前に現はれ、或はまた直ちに想ひ起さる」と告げ、手を其額におくこ

と三四秒の後、之を離してその見えたるもの、想ひ起したるものを問ひて語らしめる、この方法は直ちに病原的觀念をあらはすものではないが、その最寄の大體の觀念を喚起するものである、これを端緒として次第に追究し、追想が絶えれば、幾度でも前頭壓定法を繰返して、病原的觀念を發見するのである。

この療法を施す病人は、多少教育があつて療法の意味を理解し、醫師に厚く信頼する所の者でなければならない、そして老年では追想が活潑でないから、五十歳以下を適當とする、病原的觀念は病人に取つては多くは極めて不愉快な、口にするのは素より思ひ出すのも嫌ひ、或は極めて祕密のものであるから、稍もするとこれを發見せられまいとして殊更に隱す傾きがある、それで却々一度や二度の施術では目的を達し難く、長い時日卽ち六箇月でも一箇年でも費して、遂に病人が屈服して、一切の病原的追想を白狀するのを待つと云ふだけの忍耐が必要である。

そしてまた術者の方では、たゞ病人の語る言葉をきいて判斷する許りでな

術者の注意

く、言葉の緩急の具合とか、突然云ひかけて止めし事とか、急に笑ふ事とか、赤面する事とか、その他顔色や手足の動き方まで注意して病人の内心の感情をも洞察し、それと病人の云ふ言葉とを綜合して判斷すると共に、病人の隱さんとする所を發くやうに努めなければならない、而して其病源が解つたら其原因となりし事を思ふ存分に語らしめる、さうすると其惡い精神的の元素は消滅して健全的元素のみ集まる、其健全の精神的元素は化合合成して健全なる精神となり、健全なる肉體を構成するのである。

第四章　精神分析合成療法の實例

不平悲觀を矯正せし實例

二十五歳になる青年の母、青年を伴ふて講述者を尋ねて曰く、此子は見る者聞く者悉く不平を云ひて悲觀する、殊に食事の際如何に美味の物を膳に載せて出しても、不味にして食へぬとて大に怒る、又親が何を云ふても反對していじれる、此癖を癒して下さい、と云ふた、此場合に普通の暗示術療法で

催眠中に病原を語る

病原は失戀

あると、何を食ふても味い」「親の言をよく守る」との暗示を與へるを常とする、併し其れと趣きを異にした精神分析合成療法を其青年に試みた、即ち其青年は平常頭重の病氣ありとの事故、先づ其頭重を先に癒してやると云ひ、其青年を催眠狀態に導きしも、なかなか深く催眠せず、然れども頭重の症候は消えた、次後九回の施術によつて、全く理想の第三期の催眠狀態にする事を得た、依つて病源となりし精神的の元素を發見せん爲め、病氣の起りし年月日の以前、非常に喜ばしきこと、悲しきことのありし次第を質問し、應答せしめて、終に其病源を發見した、其問答は參考となるも、非常に複雜し居るを以て、唯其結果のみを述べませう、即ち其病氣の生ぜし精神的元素は、失戀であつた、青年が戀せし女學生があり、相思の間であつたが、其女學生と身分が違ふ故、終に其戀を遂ぐることが出來なかつた、青年は其事を何人にも話さず、一人胸中にてくよ〳〵思ひて居つたが、後程經て其女學生の事は忘れたが、一旦深く思ひ詰めし精神は、潛在域に精神的元素となつて潛み居り、其の元素が原因で不平悲觀の人と一變するに至つた、原因の失戀が癒れば總ての

不平と悲觀は自然に消えることを確かめ得た。

依つて其失戀の次第を青年をして逐一語らしめ、多年抑壓した精神を發散させ、且君が其女と夫婦にならざりしは却つて幸福である、若し其女と戀を遂れば、一生の不幸を招く基であつた、其不幸の基を作らざりしは幸福であると暗示し說得したれば、青年の不幸悲觀は消えて、愉快な樂觀な人となつた。

水を飲む事の出來ぬ病人

水嫌ひを癒した實例

ブロイエル博士が治療したヒステリーの患者は、夏の日暑さが烈しくて甚だ喉が渴いた。そこで水を呑まうとして、コップを唇に觸ようとすると、急に飲む事が出來なくなつて、恰も恐水病にでも罹つた樣に其を押し除けてしまつた。そして數秒間氣絕した。氣絕から覺めても、如何しても水を飲む事が出來ない、止を得ず「まくわうり」の如きものを與へて、激しい渴を癒してゐた、こんな事が一月半も續いた、ブロイエル博士は此患者に催眠術を掛て催眠させ、病原となつた觀念を探り始めると、患者は驚て自分の嫌ひであつた

臨場苦悶恐怖症患者を分析した實例

或る女教師の事を云ひ出した、そして追想を求めて行く中に、患者が曾てその教師の所へ行つてゐたときに其處に自分の嫌ひな一匹の小犬がゐて、コップから水を飲んだ事をさも嫌なやうに話した、この時の不愉快な感動が、その患者をしてコップから水を飲む事を出來なくした强迫觀念の原因である事が明瞭したので、博士はその自ら抑壓してゐる嫌惡憤怒の感情を烈しく出させてしまつた。すると患者はやがて水を吳れと云ひ、多量の水を飲んで、コップを口に當てたまゝ、催眠から覺めた、そして其の後永久にその病狀は治癒して終つた。

諸種の苦悶を癒した實例

フロイド氏は嘗て諸種の苦悶卽ち、臨場苦悶及び諸種の恐怖心を有する三十八歲の婦人患者の精神分析を試みた、此種の患者に多く見らるゝやうに、彼女も此病氣が結婚して後に起つたといふ事を拒み、ずつと若いときから此病に罹つて居たと言つた、卽ち彼女は十七歲の時彼女の生れた小さい町の街道で初めて眩暈苦悶失神を起し、二三年前今の病氣になるまでは時々

頭を壓すと病原を語り出す

如上の發作が去來したと言つた、フロイド氏は此最初の眩暈がヒステリー性で、之を分析する必要があると考へた彼女が知つて居る所は只その町の大通りの所で、買物をしようと出かけた時に、初めて眩暈が起つたといふことだけである、「何を買はうと思ひましたか」とフロイド氏は尋ねた、「いろんな物――舞踏會に招かれたので其準備をする爲めの物と思ひます」と患者は答へた、「何時その舞踏會はありましたか」「二日後だつたと思ひます」「舞踏會の二三日前に何かあなたを興奮させる事があつて、それが深い印象を殘したに相違ありませぬ」「いえ私は何にも知りません、何にしろ二十一年以前のことですから」「年數なんかどうでもいゝですが、あなたは其事を思ひ出すでせう、私が暫らくあなたの頭を手で壓しますから、それを止めた後あなたは何か見或は考へるでせう、其を私に言つて下さい」フロイド氏は手を彼女の頭の處に當て壓したが彼女は默つて居た、「何にも心に浮びませんか」「私は何か考へて居ました、しかしそれはこの事と丸で關係のない事でした」「いや一寸それを言つて御覽なさい」「私は死んだ若い娘の事を考へて居りました、その女

病原を探求する顚末

は私が十八の時即ち一年後に死にました」「その事に就て少し吾々は御話しませう、あなたの御友達はどうしたんですか」「その女は最も親しい友達でしたから、その女の死んだ事が非常に私の心を動かしました、町内で評判の若い女が又二三週間前に死んだのです、その時私は十七歳でした」「それ御覽なさい、私があなたの頭を押したので、手係りになる考へが浮んで來たでせう、それであなたは初めに街道で眩暈を感じた時に何んと考へて居たかを言ふ事が出來ますか」「何にも考へて居りませんでした、たゞ眩暈がしたゞけです」「それは不可能です、かやうな病氣は必ず何かの思想に伴つて起るものです、も一度あなたの頭を押へませう、さうすると考へ出せませう、さあどんな事が心に浮んで來ましたか」「あゝ私が三番目だといふ事が心に浮びました」「それは一體なんといふ意味ですか」「私が眩暈を起した時に私も、他の二人の樣に死にはしないかと考へたに相違ありませぬ」「なる程發作の時にあなたの友人の事を考へましたね、その友人の死が非常な印象をあなたに與へたに相違ありませぬ」「はい全くです、私は友人が死んで居るのに舞踏會に行か

なければならぬかと思つて非常に恐ろしく感じました、しかし舞踏會の面白さを思つたり、又招待されて居ると思つたりすると、こんな悲しい友人の死などの事に就て考へたくないと思ひました」

意外の事が病原になつて居る

かくして發作の原因が大分説明せられた、しかしこの觀念を生じた際の四圍の事情を知る必要がある、フロイド氏は偶然にも是に就て旨い想像を畫いた「あなたはその時どちらの通りを歩いて居たか覺えて居ますか」「確かに古い家のある大通りだつたと思ひます今その通りが目に見えます」「あなたの友人はどこに住んで居ましたか」「同じ通りです、私は丁度その家の前を通りました通つた後二軒目位の所で發作が起りました」「そんならその家の處を通つてあなたの死んだ朋友のことを思出し又之に對してこんな事は考へたくないと思ひましたね」しかしフロイド氏はまだこれにて滿足しなかつた、かやうな狀態であつた婦人をヒステリーにした原因がこの外にあるに相違ないと考へた、即ち月經時と關係をして居ないかと想像して氏は次のやうに尋ねた「あなたは通常毎月何日頃月經がありますか」茲に於て彼女は少しく怒つてあなたはそんなことまで聞かうとするのですか、私は月經が極めて稀で且不規則であつたことだけを知つて居ます、十七歳の時は只一度だけでした」「そんならその月經のあつた時を知る樣に日と月とを數へて見ませう」月ははつきり答へたが、日は多少曖昧で、例祭日の前日か或はその前々日であつたと答へた「その祭日と舞踏會の日とは餘程違つて居ましたか」彼女は靜かに答へて曰く「舞踏會は丁度その祭日の日でした今思ひ出しましたが、一年にたゞ一度あつた月經が丁度舞踏會に行かなければならぬ時に初まつたといふので、非常に私は感動しました、殊にその舞踏會へは初めて招待されましたので」と茲に於て事件の聯絡が全く明白になり、ヒステリー發作の機制が分かつてきた、二十一年前の記憶を喚び起すやうにした、フロイド氏の手際と苦心とは非常なものである、と言はなければならない、而してこの古い記憶、即ち心的外傷が喚起されて、その血路を見出したと同時に、此患者のヒステリーは全癒せられたといふことである。

三十八歳の婦人の病原は十七歳のときに起りしことを發見せり

吃音を癒した實例

吃音が癒つた

苦悶を有する神經病者は屢々奇妙な異つた動作をする、と云ふことより思ひ付いてダットー氏は從來種々の方法を試みて、成功しなかつた吃音に精神分析療法を適用して見た、その效果は眞に奇蹟と思はれる程迅速に表はれて來た、多年の間吃る癖が治らないでいろ〳〵の方法を試みても無效であつたのが、僅か六日間分析療法を實行して見たら、充分に救治の效が現れた。

吃音の原因は幼時の出來事

この分析療法を試みた時、患者は三十六歳であつた、八歳頃に大きな犬に驚かされたので吃る樣になつたのだ、と彼は思つて居た、しかし母親は患者が二歳の時にヂフテリアに罹つた爲めに吃る樣になつたのだと思ひ込んで居る、分析療法を實行した經過は、時間も浪費せず非常に早く結果を出すことが出來た、これは患者から充分の信頼を最初から受けて居た爲めである。分析が試みられると間もなく患者は最も眞面目の狀態となつて、幼年時代の追憶を始めた、既に六歳の時彼は手淫に惑溺して居つた、而も彼は當時四歳の妹と交接類似の眞似をした、其後すぐに妹は死んでしまつた、この出來事は彼に悲哀の印象を與へ、この行爲を憶ひ起す毎に悲しみ多き苦痛に惱まされて居た、一方彼は非常な小心家で、誰れにもこの惱みを打ち明けることを敢てしないで、唯一人で苦しんで居た、從つて誰も彼れの祕密を知らないのであるが、自分では何時か必ず惡事露見して、永久に世人の嘲笑を招き、身の破滅を來すであらうと深く恐れ慄いて居た、此の事がフロイド氏式精神分析によりて發見され、打ち明けて話して仕舞たれば悔罪の苦惱は和められ呵責の重荷は滅せられた、其結果吃音は全くよくなつた、讀方や、發音に難澁をする言葉の蔭には當然病原的の記憶錯綜が作用して居る、故にこの患者が主として難澁する所の言葉を順次に取つた、その自由聯想や記憶心像を出來るだけ精細に分析して見た、例へば耶蘇復活祭の語を滿足に發音するに、患者は數回口訥つた、其時すぐ患者の記憶に上つたものは何かといふた、患者が四歳の頃、復活祭の日に父親が母親を殘忍に打擲して居る悲痛な光景であつた、是は母親が父の命令に背いて、私生兒を產むだ、母の妹を世話した爲めであつた、彼はその母親の膝下に跪づいて痛ましき光景を

父母の喧嘩が吃音の病原をなして居る

病原は少年時にした悔罪の念

目擊して居た。その後三十餘年を經過して居るが父親の聞くに堪へざる言葉や侮辱を尙あり〳〵と憶ひ起すことが出來た。然しその三十餘年の間に起つた悲痛の他の出來事は別に心に浮ばなかつた。患者自身の僞らざる告白に從へば性慾的要素を含むで居る愛情を以て、非常に其伯母に戀着して居つたので、尙一層追憶の念を强めたのであつた。常に患者は極端と思はれる程母親に愛着して居るが、父親に對しては全く正反對に嫌忌の感を懷いて居た、その他いろ〳〵告白があつたが、いづれも戀愛や、性的經驗に關した事柄であつた、その中二三の戀愛に關する出來事は常に彼をして深く悔罪の念に堪へざらしめたものである、惡事をしたと云ふ念慮と、遲かれ早かれ何等かの形で、必ず我に報いが來ると云ふ恐怖がある爲に懊惱して居つた、長々しき告白が終つたので、ダットー氏は患者の追憶する事柄について、其相互關係を一々說明した、そして適當の安心を與へて、悔罪の念を和らげてやつた所が、その後一週間ならずして吃る事なく完全に話し得る樣になつたといふ事である。

吃音の諸原因

是はフロイド派の研究であるが、フロイド說の批評家アドラー氏は吃音の原因を劣等の感に求めた、卽ち兒童は凡て偉大なるもの、大人、敎師、大將たらんとの希望がある、所が父親が餘り嚴格過ぎると、或兒童に於ては執拗、頑固になるが、或兒童に於ては臆病となり、延いて吃音を生ずるやうになる、アドラー氏の擧て居る例によると、三歲の時から吃音となつた一男子は、その父の嚴格なることが吃音の原因であつた、或男兒は男の衣服を着せると吃音が止み、女の衣物を着せるといつて嚇すと吃音になつた、或兒童は來客がその子供の寫眞を女兒の寫眞だといつたので吃音となつたといふことである、蓋し女といふことは劣等を意味するために如上の結果を生ずるのである、而して此等の吃音者に確信の念を生ずるやうにした所が、凡て全治するに至つたと報告して居る。

此二派の主張の中、孰れが眞實であるかといふに、他の研究家によると、何れも眞實である、但しフロイド氏說もアドラー氏の說も共に其一部分の吃音を說明するに止つて、その現象全部を說明して居ないと非難して居る。

患者は數十回受術する覺悟を要す

奇を好むは人情の常なると、病人中何か新療法によりて自分の病氣を早く癒したいとの慾望より、精神分析合成療法の效顯著しいと聞くや、直に來りて私を尋ね、精神分析合成療法を施して下さい、至急に一回丈施して下さい、今日夕方發の汽車で歸國するのですから、大急ぎで一回施術し全治さして下さい、と云ふものあり、然らざるも二三回の施術で全治するものと早合點して來り、二三回受術して全快せざると之れは詐僞にかゝつたと錯誤し質問する患者あり、故に術者此療法を行ふときは、稀には二三回で全治するものあるも、多くは精神を分析して病原たる元素的の精神を發見する丈にても、三週間四週間を要するものあり、中には六箇月もかゝりしものもあることを詳細に話し、受術し初めし以上は必ず全治する迄受術する覺悟を要することを、よく領解せしめし上に施術に着手することが必要である。

暗示療法と說得療法との別

說得療法の根柢

第八巻　學證說得療法

第一章　學證說得療法とは何ぞや

精神療法の總てが廣義の暗示術療法である、然し單に「痛は取れた」「癒つた」「健康になつた」と暗示するのみでは、潛在精神で病的となつて居る原因が消えないことがある、と云ふので精神分析療法を發明したのはフロイド氏である、更に又精神分析療法より一歩進めて病原を消滅させんとするのが、ヅウボア氏の學證說得療法である、學證說得療法とは學理上より患者の惱める病氣の本態を說明し、論理的に證明をなし、病的の觀念思想を除き、健全の精神となし肉體をも健全にする方法である、神經病者の多くは謬れる觀念や感情を抱いて居る、其爲めに自分の病氣を非常に重く考へたり、或は小さな苦痛を大きく考へ、其の結果惡くもないことまでも苦痛のある樣に考へる人がある、自分の心で病氣を造つて居る人がある、詰らぬ事に執着して煩悶

神經衰弱ヒステリー治療の最良法

し懊惱し、爲に肉體に故障を來せるものがある、斯樣な病人に擧證說得療法は最も適してゐる、卽ち精神的外傷によるゝ神經衰弱、例へば破產離婚、失戀、落第等によつて、非常な心配や悲觀の結果憂鬱に陷つて居る樣な人には最も適當である、擧證說得療法の大家ヅウボア氏の說いた、擧證說得療法の大要に依れば、此療法は患者に其病氣の根本的理由を說明して、患者に自覺せしめて患者自身の精神にて、徐々に其症狀を矯て行かしむる療法である、神經衰弱や「ヒステリー」の樣な病氣は、其原因が多くは患者の精神の變調である。一般に其病氣の原因と見做されて居る、過度の勉强や憂慮は、唯此病氣が發生する機會を造つたのに過ぎない場合がある、故に若し說得によつて、其病氣の心源に就て充分に理解することが出來れば、神經衰弱や「ヒステリー」の樣な病氣は根本的に治療することが出來る、卽ち言語暗示療法にては一時性に其患者の苦悶的症狀は取り去る事が出來ても、永久的に治療と云ふことが求められない場合がある。

元來神經素質其者に弱點のある神經衰弱の樣な疾病には、其患者の謬つた觀念や感情に就て、其根本的弱點に向つて、合理的の擧證說得を施し、患者其れを自覺し初めて治療が完全に行はれるのである。

若き娘の幽靈が出た

第二章　擧證說得療法を行ふ法

擧證說得療法を行ふ法を明かにせんが爲めに、主觀的に之を說明するより、客觀的に適切な實例を擧ぐる事が解し易い、故に講述者が行ひし實例を左に申しませう。

講述者の處へ六十五歲になる老人にて幽靈を見て發熱し、煩悶苦惱する病人が來た其病人青年の折夫婦の約束をした娘があり懷妊した、然し或人の勸めによりて他より妻を迎へることゝなつた、其れを曩に夫婦約束をした娘が聞き、落膽の餘り終に川に投身して死した、其當時其事が痛く腦を刺戟し良心の呵責に堪へざりしが、後其事を忘れて居りしに、先夜暑中にて寢苦しくてどうしても眠られず、フト眼を開いて見たら先年川に投身した娘が髮を振り亂して、幽靈となりて暗中にポーッと見えた、ハッと思ふと共に全

暗示療法と擧證說得療法との差異

身流汗甚だし、其れより發熱して苦悶に堪へずと訴へた。

此場合に普通の暗示療法であると「幽靈は出てはしない」「何にも氣にかける事はない」「健全になつた」との暗示をする、然し講述者は之に普通の暗示療法を行はず、擧證說得療法を行ふた、卽ち一夜其病人の寢所に行き、如何樣にして幽靈出でしか、其顚末を聽き、幽靈出でし時刻に全く燈火を滅して幽靈の出でし晩の如くなし、檢査したるに病人はアレと云ふて布團を被りて苦めり、病人曰く「今前方に幽靈出でた」とて苦悶せり、講述者徐に試驗し見たるに、西洋窓の硝子より瓦斯燈の光線暗き室內の壁に影じたるものを、幽靈と錯覺したるものである事を確めし故、病人に向ひ彼は幽靈ではない、瓦斯燈の光線が壁に影じたのである、御覽なさいと云ふて病人をしてよく見せしめたれば、病人初めて安堵し苦悶も忽ち消えた、尙數回の說得にて日に增し健全となつた、暗室の壁に影じた光線を幽靈と思ひ違ひしたのであるとの證據を擧し點が卽ち擧證である、而して幽靈でないから安心である、健全になるとの說得をしたのが、卽ち說得である、故に此擧證說得療法を施し得る

赤色を見ると起る胃病

說得の方法

病人は、精神病を除きます、精神病者に對しては、如何程擧證しても說得しても無效である、精神病者は催眠せしめ置きて暗示する所の催眠術療法がよい、尙擧證說得療法の大家ヅウボアー氏の行ひし實例を左に述べませう。

ヅウボアー氏は一人のゼスイット派の僧侶の錯誤による假想病を、擧證說得療法にて癒やした、其實例に曰く「自分等は僧院で午前中に一の花園から他の花園へ花を移植する役目を有して居る、この働きで私は胃部に一種の强い痙攣を感ずると同時に深い自己自失を感ずる、この現象の原因は、全くゼラニアムの花の赤い色が私を刺戟するのだ、此言葉に對してヅ氏は「そんな事はありますまい」といふ、と患者は「それは事實です、確な證據があります、それはどんな小さな赤い花を見ても胃に故障が起る、又壁にかゝつた赤い色の背景を有つた像に對して私は殆んど凝と見ることが出來ません、書物の赤い表紙さへ私は凝視することが出來ません、唯その書物の黑い文字と、白い餘白を見た時に、この胃の感じは直ぐ無くなります。」

患者は之を確心して答へる、ヅ氏はそれに對して「君その說明は駄目ですよ、

自己の妄想病氣となる

君が勿論眞實の視覺によつて君の胃の病氣と全く關係のない、赤い花の色の感覺を誤信し、君は自己暗示に迷はされて居るのです、この暗示があつた刹那から君は赤い色に對して常に胃の苦痛を感ずる樣になつたのです、全く暗示の必然的結果なのだ、從つて赤い色と胃とは何等の關係もない事を自得さへすれば、君の病氣は直ぐ癒ります」「君は赤色の光線は紫色の光波より長いことを知つてゐるでせう」「其のことは知つて居ます」「赤い色は寫眞の種板にすら甚だ弱い刺戟しか與へない、況んや種板とは全く違ふゼスイット僧侶の胃や頭を、そんなに刺戟するとは思はれぬでは有りませんか、こんな事は生理上の事柄ではなく全く、心理上の間違ひです」ヅ氏は恁う云つて患者を病室に送り込だが、翌日私が見舞と直ぐ「どうも有難う、何とも無い樣になりました」と答へて僧は元氣よく笑つた、其後ヅ氏は此小話を神經的の患者に向つて屢々話をして患者を笑はせ、非常な心理的治療の效をあげたと云ふ、去り乍ら斯の如く自己の妄想に依て、自己の思慮を失ひ、爲に自分で病氣を造りて病氣となる幾多の患者をば、心から同情し憫まずに居られぬ、說得療法は此實例に基きて行へば、確かに甚大の效果が擧がります。

第三章　擧證說得療法の模範例

神經衰弱患者隔診法

講述者が常に行つて居る擧證說得療法と、全く合致した方法を行ひたる某大家がある、依つて其大家の說を次に紹介しませう。病人は神經衰弱である、其病人の既往症聽取の際には、よく其原因と現在症の訴へを語らしめ、而して又質問もする、卽ち原因に就ては、單に精神過勞が存在せしことを、概括的抽象的に聽くに留めず、一々其過勞の事情、例へば執務の狀況勉强の時間、心勞の程度、或は其際の境遇營養の關係等を聞き、或は又特殊事件に關係して起れるものならば、其之を心痛せし事情を聽き取り、其れと同樣に現在症の訴へに就ても聽く所の悲觀觀念又は强迫の內容は如何樣のものであるか、睡眠の良否、不眠の狀況は如何、且つ其の際の夢及び夢の內容などをよく聽き取り、尙頭痛、頭重、心悸亢進、記憶減退等の詳細を聽き取り、殊に患者が既往症、現在症、陣辯の際には、診斷上餘り關係なき事實の冗辯をも宜しく同情を

冗辯を傾聽

說得の材料

以て、熱心に之を傾聽し、然る後に身體の各部を診査する、殊に其最も苦慮する患部は殊に注意して診査する、然して愈々治療法に取り掛るのである、以上の如く病歷や現在症の訴へを聽き、診査し畢つて熟慮して見ると、是迄醫療に依りしも何が故に疾病が治癒し得なんだか、或は輕快し得なんだか、何等かの最要點が思ひ當るものです、之が擧證說得療法の材料となるのである、殊に曾て某氏の精神療法を受けしも效がなかつたと云ふ病人は、多くは其癒法に對して至誠を缺きし故である、又は僅か一二回乃至四五回の受術で癒らざりしとて、受術を廢て其罪を術者に歸せしめる者がある、斯る患者は今回の施術も困難であるから、大いに研究し注意すべきである、輕き神經衰弱者には、別段擧證說得療法と名づくべき仰山なることは入らないが、小六ケ敷訴へをして一片の說明では聞きさうなき患者には、擧證說得療法が必要である、擧證說得療法の材料は何かと云ふに、其場合により千差萬別であるが、最も普通は患者の心理狀態、衞生法、養生法に關するものである、神經衰弱者の原因事情又是迄の療養中の生活法をよく聽取する中に、必ず間

曾て精神療法を受け效なき病人

病氣の爲めに惡しきことは皆除く

違つた固定觀念、或る有害不適當と認むる點を發見する、或は患者が修養法の實行を怠りしか、或は前療法の及ばざりし何等かの點を發見する、例へば施術を受けても心機が一轉せざるとか、疾病の害因たる職務には依然として當り居るとか、或は不快の家庭若くは境遇に居て、其羈絆を脫くことを得ぬとか、其他營養が不足せりとか、仔細に亙りて聽取する內に、此病人の行ひ中何が最も有害で、何が最も賞推すべきかの要點を發見する、卽ち是等の材料に依て患者の境遇、傾向及び擁く所の觀念に照合して、患者の心理狀態を洞察して、其心理に合する樣に說得するのである、卽ち說く事が難しき事ではない、患者の心を知て之に當る說得をするのが難いのである例ば試驗前の學生には、勉强時間の短縮や、朝夕一合宛牛乳の必要ある等の攝養法を敎へ甚だしき者には休學の必要已む可らざるを說く、旅籠屋の主人には生活法の不規則が原因で、睡眠の不足飮酒の不良なること、時計師には其夜間まても就業しつゝあることの頗る不可なること、鑄物師には其白熱室內にて當分就業を斷念すべきことを說く、又農夫で營養の良き神經質者には、徒

攝生法の注意と說得療法との區別

に其「ヒポコンデリー」の觀念に捉はれて懊惱せんより、寧ろ少々なりと規則正しく勞業するの有益なるを說き、而して家庭の不和が過勞の原因となりしものならば、轉地療法、隔離法の必要なるを說く、然れば吾人の言ふ所一々患者の思ふ所の肯綮に當るが故に、患者大に心服する、斯して患者の精神に安心を來たし、沮喪せる自信力は之れにより興起するのである、茲で注意するが、是迄述ぶる所によれば、人或は說得療法とはこんなものであるか、と無藝に其方法の淡味なるを嘲り、之れならば普通誰れ人も知つて自然に行ふで居る攝生法の注意である、と一笑に附せんとせらるゝ方あるやも知れざるも、是れ決して然らず、普通行ひ居る攝生法、養生法の注意は、通例其意義多くは浮薄なる者であるが、擧證說得療法は患者の心理狀態を究明し、事實の誤認を確定し、而して研究の極、確に病原をなしたる事柄を突き留め、除去する樣に與ふる所の言辭は、彼とは全く段を異にして居る、外形は同じ樣でも療法上の價値は丸で違ふ。

それで精神過敏にして、精神內部に絕え間なき不滿、苦慮、恐怖に襲はるゝ興奮に對しては、普通の養生法修養法のみでは癒る者ではない、其原因を深く探求し、擧證し說得して始めて心機轉換し、精神は安靜となる、實に神經衰弱の療法には、心機轉換と精神の安靜を得れば、療法は既に成功せる者である、

心機轉換と精神の安靜

との「アシヘンブル氏」の語は適切である、心機轉換と精神の安靜とを得ることは獨り神經衰弱の治療に最も緊要であるのみならず、萬病も又之により快癒する。

國民道德と精神療法

私は精神療法を研究すると共に、國民道德を普及して居ります、故に國民道德の事を一言申しませう、國民道德とは國民たる資格に伴ふ道德で、忠孝を徹底的に實行せん爲め必要の道德である、凡そ人は共同生活をして居るのである、故に其共同の安寧秩序を害せず其同の利益を圖らなければならぬ、宗敎に云ふ博愛慈善、需敎に云ふ仁者之れである、精神療法を行ふのに他人の爲め世間の爲に盡したいと思ふて、熱誠を以て行はゞ夫れが國家へ對しての勤めとなり、自分の爲めとなり、親孝行となり、忠義ともなる、此國家的精神を以て他人に滿足を與へる事によりて、己が滿足を得るに至るのであ

國家的精神を以てする精神療法

る、自分の身が可愛いから、他人の身を可愛がつてやらなければならぬ、私慾の爲に他人の利益を害することをすると、軈ては其れが自分の身を損ふことになる、先帝陛下が軍人に下し賜りたる勅諭の結文に「心から誠あれば何事もなるものぞかし」と仰せられました、吾人の行ひ中、成功せざる事は誠が足らなかつた故である、精神療法を行ひ效果の擧らざること萬一あらば、夫れは誠が足らざる故である、效の擧らぬ其罪は、術者にあることがあり、被術者にあることがある、將又兩者にあることがある、術者被術者よく此意を體して、誠を盡したならば、必ずや大效果を擧げ得ることは明かである、精神療法を行ひ、多くの病人を救はゞ國益である、國家が發展する基礎である、國家を發展せしめたい、國益を圖りたいと云ふ誠意を以て精神療法を行ふのが、卽ち國民道德の實行である。

第九卷　心靈術療法

第一章　心靈術療法とは何ぞや

人間は卽ち神

凡そ人と雖も清い精神を持て、社會の爲め人類の爲に、博愛慈善を旨として清い行ひをすると、其行ひは神の行ひである、其人は卽ち人にして神である、故に物慾を去り無念無想となり宇宙精神と同化したる精神、卽ち神の精神となりて行ふ、其行ひには偉大の權威がある、其神の如き偉大な精神の働きを心靈と稱する、換言すれば精神が靈的の活動をする場合を云ふ、故に心靈は、物質を離れて存在し、物質を左右する力を持つて居る本體である、心靈は總ての根元である、尙心靈の作用を明かにせんが爲に、心靈と五官との關係を申しませう、眼があつて物を見、耳があつて物を聽き、舌があつて物を味ひ、鼻があつて物を嗅ぐ、と云ふ風に解釋すれば、五官があつて始めて心靈の活動と云ふ事があるやうに思はれる、之は間違つた考へだと思ふ、實際は之に

精神卽ち心靈

心靈は總ての根元

心靈と五官との關係

反して、心靈の活動が根本になつて、五官が發達したものではないだらうか、心靈に見るとか聽くとか云ふ作用があつて、之れが働く爲に其れに相應する器官が出來たのであらう、所が一旦此等の器言が出來た後には、是等の器言は作用と云ふものを信賴する事になつて、其爲めに心靈の活動が蔽はれたのであると思ふ、其結果として心靈の作用と云ふ事には、誰も氣がつかないやうになつた、佛教の所謂安念雜慮の爲に、眞如が掩はれて居たのである、而して心靈術療法は、先づ宗教に歸依し、修養を積みて大信仰を得、心靈の活動を大ならしめ、其偉大なる力に依て疾病を治療するのである。宗教とは何であるか、宗教とは人類が神的なる權威に信賴し、以て最後の安心を求むるものである、神的とは必ずしも人格的の神を意味するものではない、唯人間以上のものと云ふ意である、此れを實際に見るも、宗教の對象は彼の物活教に於けるが如く、トテム教に於けるが如く、亦佛教に於けるが如く、非人格的なるものも少くない、されど兎に角、宗教の容體(對象)となるものは、常に人間何上のもの、或は人間何上として考へらるゝ所のものであるは

爭ふべからざる事實である、而して又其等の宗教的容體が常に人類に對して一種の權威あるものとして感ぜらるゝことも事實である、假令ば佛教に於ける眞如の如く、殆ど純理的のものと雖も其人に對するや單に形式的なる「二二が四」風の內容なきものとして感ぜらるゝのではない。

實に堂々たる權威と勢能とを有するものとして感ぜらるゝのである、若し然らずしてそは單に二に二を掛くれば四となると云ふが如き、唯知識的に認識せらるゝに止まるものであるならば、如何にして能く人を動かし、人を安んじ、人を救ふの妙用を現はしませう、其れが對象となるものが一見純理的純形的なるの故を以て、其權威ある一面を思はないものは、未だ眞に宗教の眞趣を解せざるものと言はなければならない、猶一言すべきは宗教はフイテなどの言ふが如く單に神亦は神的なるものを識るの謂ひではない、寧ろ信じて歸依するを以て其が本旨とする、即ち宗教は神を知ると共に、又全く此れに信賴するを以て眞義とする。

蓋し宗教の主觀的意義を尋ぬれば安心立命にある、而して安心立命は絕對

的の信頼歸依より來ると云ふ意味の下に、術者は何宗を問はず宗教を信じて之に歸依し、精神を修養し而して術者たる確乎不拔の信念を養ひ心靈を働かし、以て重病を癒すのである。

第二章　渡邊藤交式心靈術療法

日本心靈學會長渡邊藤交氏の行ふ心靈術療法の要點は術者の心靈力が患者の病氣に感應して病氣が癒るのである、之が治療を行ふには術者は患者と相對し身を正しくして坐り、まづ調息と云つて呼吸を靜かに規則正しくして心を落附け口を閉ぢ、下腹部に緩りと力を入れ、泰然とした姿勢で鼻から細く微に息をし、たゞ下腹部だけが極めて徐々に伸縮しつゝ、外見には殆んど氣息の自然に絶えた如き狀態で居る、所謂丹田呼吸をなす、さうすると雜念は全く消え去り精神は澄み渡り忘我の域に達する其時吸氣を下腹八分の程度に堪へ、自分の手の兩方の指端を患者の疾患部にあてゝ眼を輕く閉ぢる、さうして其處にある病患を治癒せしむると云ふ觀念を強く頭に浮

丹田呼吸と波動感應

べる、と同時に下腹部に微妙な波動的震動を起さす、この波動は直に患者の疾患部に傳はる、術者は其治癒觀念を患部に向つて強烈に集注せしめる。この波動感應は本法の眼目である、波動感應の持續する時間は二三秒から五六秒の極めて短時間で充分である、波動感應はわざ〳〵起さうと欲して起すのではなく、腹力呼吸が妙境に達した時術者の手を患者の身體に觸れれば、自然に起る現象であつて、この法を行はんと欲する者は、豫め調息から腹力呼吸までを充分に修熟しなければならぬ、其波動感應の際に「エイッ」といふ掛聲を二三回掛けるとよい、これは禪家に於ける喝と同樣で、術者の心靈力をその刹那に猛烈に發揮させる手段となると共に、患者の心機を一轉せしめる働きがある。

禪宗の喝

此療法は獨り相對してのみ行はるゝに止まらず、遠隔地にある患者にも此療法を施すことを得る、術者は豫め何日の何時何分に術を行ふ、と患者に通知し置き、其時間に患者は心を平和に持ち深呼吸を行ひ居る、とその時術者は靜座默想して病氣は癒ると強く觀念する、と何百里を隔てゝゐても、術

遠隔療法

者の心靈力が通達し感應して重病をも治療し得るのである。

第三章　古屋鐵石式心靈術療法

術者の修養法

術者は何れの宗教を問はず、何れかの宗教に歸依して、精神を靈的に活動せしむる樣修養するのが、此療法を行ふ前提條件である、其修養法として先神佛を禮拜し、祈禱をしなければならぬ、禮拜と祈禱とを行ふ事早きは一二箇月にして、神佛の靈顯を自覺するに至る、然らば、患者を治療する實力が出來たのである、すると患者に對して愈々施術するのである、卽ち態度を正しくして正坐し深呼吸をなし、祈禱をなし心靈をして活動せしむるのである、患者にも又深呼吸を行はせ、神佛を禮拜させ、術者は己が精神は宇宙と同體となり、確に神佛を認むるに至つたとき、兼て檢診し置きたる患部に輕く手を當て、痛みは取れる、健全になると心力を凝めて心靈を働かすのである、且言語を以て「痛みは取れた」「健全になつた」と暗示すると尙よい、患者も又此治療で自分は屹度健全になります樣に、と强く神佛を念ずるのである、すると術

深呼吸と神佛の禮拜と思念と言語暗示

者の精神の感應と、神佛の靈顯と患者自身の信仰とによつて重病も癒るのである、余は此法によりて、生殖器の障害卽ち陰萎、遺精、夢情、早漏を容易に治したことがある、重き神經衰弱を全治せしめたことがある、尙此療法を行ふ際に神靈治療法を準用して行ふと最もよい、神靈治療法のことは、拙著神靈治療法」を參照ありたい

彼の人體オーラと稱する者は、人體の心靈の作用には非ざるかと思はるゝを以て、次に其オーラに就て述べませう、オーラは動物には存せざるも、人體にのみ存在する一種の霧圍氣的發光體である。

倫敦の一醫師キルナー博士之に關して「人間霧圍氣」と題する書を公にし新聞雜誌記者を招きて其實驗を見せた、博士は黑幕を垂れたる暗室內で、青色の液體を入れた衝立の助けによりて、人間の手の周圍を圍繞せる青白き烟の如き霧狀の者を見せ、尙普通の磁石を此霧狀の物體に接近せしむると其の物體が發する光線は磁石に近づかんとするが如き傾向あるを見せた。博士は更に彼の青色液體を入れたる衝立を隔てゝ裸體を現はし、人體の各

部に從つて其厚さを異にする完全なるオーラを示した、博士の研究によれば、オーラの形狀は其人の病氣によりて變化するものである、故に診斷上甚だ有益である、殊に痛みのある局部のオーラの形狀の差點は至つて著しいことを報告した、紐育の一醫師はオーラを寫眞に撮影し人間の死と同時にオーラは全然消失すると云ふて居るがキルナー博士は之に對してはまだ疑を挾で居る、尙佛國の一醫師も紐育の一醫師と同樣の說を主張して居る。

オーラと心靈

彼の基督の畫像、佛像の畫を見るに、頭部の周圍には俗に云ふ御光がある、之れはオーラを表象したものと解釋することも出來る、人間の心靈力が偉大に働くときは、オーラが盛に發散するものに非ざるか、完全のオーラが病人の不完全のオーラを直すのが治療法となるのではないか、述べて以て學者の敎導を仰がんとするものである。

第十卷　心理療法

第一章　心理療法とは何ぞや

心理學の定義

心理療法とは心理學を應用して行ふ療法である、心理學とは如何「心理學とは精神活動の理法を攻究する科學である」されど眞に此れが定義を下さんとするには、先づ其精神又は意識なるものゝ抑々何物なるかを解說し、盡せる後ならでは能くすることが出來ない、故に今はそが大體の方法を伺ふに止めざるを得ない。

心理と心靈との差異

心理學は一種の科學である、而して此科學は精神的事實の理法を探求し、考察するを以て其の本領とする、故に心理學に於て取り扱ふところの精神又は意識は、哲學上又は宗敎上などにて云ふ所の心靈と呼び靈魂と稱するものとは異なり、現に吾人が經驗しつゝあるところの意識現象其物である、換言すればそは意識の本體として吾人が假定し、或は思索するところの超經

内部經驗の學　直接經驗の學

驗的心靈でなくて、現に吾人が思ひ感じ且つ考へつゝあるところの意識活動其物である、かゝる經驗は吾人が自己の內部又は主觀に於て、直接になさるゝところの經驗であつて、吾人が感覺の媒助によりて、外界より間接に取り入れらるゝ所の經驗ではないから、心理學を呼んで或は「內部經驗の學」もしくは「直接經驗の學」とも稱する。

諸學者の心の定義

苟も吾人が內部卽ち「觀界」に於て、直接に經驗し得るところの事象は、悉く皆心理學の材料である、故に心理學はかゝる直接經驗の材料を蒐集網羅し整理組織し、それによりて一定の理法を發見せんとすること、猶他の自然科學と異る所はない。

而して心理學者は心を如何に觀察し又如何に說明してゐるか、ヘルバルト派は云ふ、吾人は多くの觀念を有す此觀念を以て組織したる聚合體を以て心と云ふ、と又其の別なる一派は云ふ、吾人には肉體を超越したる一種靈妙なる能力がある、この能力こそ所謂心の本體であつて、感覺、感情、意志、記憶、想像はみな此本體より發現する現象である、從つて心には本體と現象との二者があると、ヴント氏は感覺及感覺の結合を以て心の現象を說いた、夫から「識」が心の基礎で感覺や、觀念や、感情や、意志は、皆心の材料にすぎぬとしたのは、ホエフデング氏である、福來博士は心とは意識と云ふ直接經驗を說明する爲の、補充觀念として立てた者である、意識は直接經驗の事實であるが、精神は假想的存在者である、意識を說明するに必要である、其で心とは境に觸れて種々の意識として表現すべき現理であると云ふ定義を下してゐる、此諸學者の說明に由て精神の何者なるかを伺ひ知る事が出來ると信ずる。

心理療法と催眠術療法との差異

第二章　心理療法を行ふ法

心理療法者たらんと欲する人は、先づ催眠術の大意を研究修得し、精神の統一を圖り得る修養を積み置く必要がある、心理療法は心理學を應用して行ふ催眠術療法である、故に純然たる催眠術療法とは範圍を異にしゐる、純然たる催眠術療法は心理學の外に哲學、神學、及び生理學を應用して成るものである、故に心理療法を目して催眠術療法の別名と思ふのは大なる誤りで

兩腕は意の儘となる

ある、而して愈々心理療法を行はんと欲せば、先づ患者を椅子に凭らせ、又は寢臺に仰臥せしめ安樂の位置を取らせ、少しも窮屈の處なき樣にして置き、術者は先づ今癒さんとする患部を檢し、檢診上必要の事項を調査し、患者に深呼吸をなさしめ置き、術者は其傍に直立して姿勢を正し、精神を統一して患者の兩手を擧げさせ左右を一尺位隔てゝ置き「私が今一二三と云ふと其兩手は寄りて掌と掌とは附着する」と言語暗示をすると其通りとなる、尙精神力を凝めて「其兩手は左右に開く、開きし兩手は兩側に下る」と云へば其通りになる、一言の暗示で其通りにならぬときは、繰り返して暗示すると終に暗示の通りになる「私が云ふ通りに君の手は自由になる如く、私が君の病氣は癒ると云へば癒る、其れ病氣は癒つた」身心は爽快になつた」と暗示すると其通りに癒るものである、併し、身體衰弱したる重症者には、手を擧げたり下げたりする暗示は避けるがよい、世間には心理療法と云ふ看板を出して、純然たる催眠術療法卽ち哲學科學及び神學を應用して行ひ居るものがある、其れは賢いやり方である、世人も又催眠術療法と心理療法との區別を

生理療法と心理療法との異る點

心理療法と哲理療法との差異

判然知らざるを以て、其れを氣附かぬものがある、中には心理療法は催眠術療法の別名と心得て居るものがある、甚だしきに至ると心理療法と云ふ名の下に生理療法卽ち身體に手を觸るゝ療法を行つて居るものがある、心理療法は心理作用によりて行ふべきもの故、患者の身體に手を觸れないのが本則である。

總て療法は名稱が異なれば、從つて其內容を異にすべき筈である、けれども、事實は同一にして只世人の受けのよい名を附けて、行つて居るものがある、又實際上名稱の異る毎に、療法の範圍を劃然と定めて相侵すを得ずとせば、實質貧弱となる恐れがある、例へば心理療法なるを以て、生理的のこと卽ち少しも患者の身體に手を觸るゝを許さずとか、又は哲學的のこと、卽ち精神力を感應せしむることは、哲理療法の範圍を侵すものとして嚴禁せんか、內容貧弱に陷らざるを得ざることゝなるを以て、心理療法の名の下に、純然たる催眠術療法を行ふものあるも亦止むを得ざる次第である。

心理療法は哲理療法の根柢は、患者の病的觀念を健全觀念に換へ、其健全觀念の通りに

病が氣より生ず

肉體を健全にするのである、大凡人は病氣となるべき物質的の原因なくも、唯心中にて「之れでは病氣になる」と思ふと其の思ふた通りに病氣になる、病は氣からとは此事を指すのである、一旦病氣となるであらうと思ふことあると、其後其事を忘れ居りても一旦思ひし觀念は潜在して居り、其肉體を左右して終に病人となす、況んや現に自分は今病氣で困ると思はゞ益々其病氣重くなる、故に心理療法は病氣になりはせざるかとの觀念又は病氣であるとの觀念を全く消えさせる、現在精神のみでなく潜在精神で懷き居る觀念までも消えさせ、積極的に健全であるとの強い觀念を與へ、其觀念の通りに肉體を健全にする法である、其觀念を與へる方法が心理療法である、觀念を換へん爲に病人を催眠せしめ、暗示がよく感應する狀態として置き、而して其れに暗示してよく感應せしめ、以て病的觀念を換へ肉體を健全にするのである。

第十一卷　氣合術療法

第一章　氣合術療法とは何ぞや

傳氣法
挫折法
誘念法
利用法
放任法

氣合術療法とは病人の精神の虚實を洞察し實を避け虚を突き、治療の暗示を感應せしむる方法である、故に病人の病的精神の實を變じて虚とする方法を知らねばならぬ、之には病人の病的精神活動中俄然大喝一聲し、病的精神活動を他方に轉ぜしむる轉氣法、病人が或る事にのみ強く思ふてゐる精神を引外して英氣を挫く挫折法、病人の病的精神の活動に對して何等の反對もせず徐に病人の氣の附かぬ樣に、精神を改めさする誘念法、病人の長所を賞讃して快感を與へ置き、終に目的の治療暗示を感應せしむる利用法、又病人の病的精神を正面より禁止しようとすれば、却つて反對に出づる性質あるものに何等の刺戟を與へずに放任して置き、自然に治療暗示を感應せしむる放任法等がある。

不動心と石火の機

氣合術療法を行ふには不動心と石火の機とを會得することが必要である。不動心とは治療に當りて狼狽せず、泰然自若として沈着に構へる事である、石火の機とは病人の精神の虛實を察し、乘ずべき機を見出すや石火の如く迅速に治療の暗示を感應せしむることである、不動心がないと却つて病人に制せられて病人を制することが出來ぬことがある、之を得る修養法としては深呼吸と神信心とがよい、嘗て述べた催眠術療法家に必須の無我の修養法を行ふとよい。

氣合の心理

而して氣合術療法を行ふには、先づ氣合術は精神修養上に如何なる效果あるものであるかを明かにする必要がある、其れに就て氣合の心理と題して、文學博士福來友吉氏の述べたる說は參考となるから、次に之を紹介しませう。「氣合は武術の上にのみ用ひられて居ると多くの人は思つて居るが、武術ばかりでなく、我々の日常の交際の上にも常に行はれて居る、勿論劒と劒とを以て相見ゆる時の氣合は氣合として最も偉大猛烈なるものであるが、唯夫ればかりが氣合ではない、精神と精神と相對して折衝するときには、其處には常に氣合が働いて居る、由來吾人の精神中には常に虛と實とがある、其實を避け虛を突くと云ふのが氣合である、吾人の呼吸は虛と實とが交代に現はれて居ることを示すもので、空氣を吸ひ込んで居る時は實の狀態で、空氣を吐き出して居る時は虛の狀態である、實の狀態には精神身體に力が充實し、虛の狀態には精神身體が力を失ふて居る、吾人が重い物を持つ時には「ウン」と云つて腹に力を容れる、ウンと云ふのは阿吽の吽で、實の狀態である、阿は虛の狀態で力の拔けて居るのである、吽と云つて丹田に力を入れる時は精神力が最も旺盛で、全身に力を充實するものである、私の故郷では昔から葬式等の不祥事に遭ふた時に魔物に附かれぬ用心の爲には、親指を中にして手を確と握り腹に力を容れよと云つて居るが、是は心理學上大に理由ある事である、何となれば不祥事に遭ふ時は精神が虛となり、其の隙に乘じて魔が附くから、その豫防として、此に對するに精神の實の狀態を以てするのであるから、理に適ふた事である、世間によく云ふ憑き物がするのは、精神に隙があるからである、卽ち油斷があるから風の神や厄病神に附かれるの

實を避け虛を突く

油斷と病氣

相撲の立合と氣合術

達磨の八方睨み

である、故に常に實の狀態にあるやうにしておかねばならぬ、擊劍でも敵を打たんとする時には口を閉づるものである、打たるゝ時にも精神が實の狀態にあれば怪我をする事もなく、痛痒を感ずる事も少いのである。若し虛なる時には思はぬ怪我をし痛みも甚だしいのである、相撲なども立合の時に阿吽を爭ふものであるから、行司は此點に大に苦心する、道理至極な事と思ふ。先年私が熊本に行つた時、星野九門と云ふ宮本武藏の擊劍の型を修めて居る柔術家に遇つたが、名人丈けに氣合の事に就ては非常に詳しい、其先生が相撲で最も興味のあるのは立合の時である、吽の呼吸で立つた者は身體は假令小さくても土俵一面に擴がつて居るやうに見えるが、阿の呼吸で立つた者は身體は大きくても影が薄い樣に見える、相撲の勝負は全く立合ひの時の虛實に依つて分るゝと云つたが、流石は名人の言だと感心した。

精神氣力の充實と成功

精神の虛なる時に當りて思ひがけぬ刺戟を受くる時は、精神錯亂して無能力となる、故に精神修養に努めた人は、常に八方に氣を配つて少しも隙がない。達磨の八方睨みとか八面玲瓏とか言ふ事があるが、是れ全く身心に隙なく常に實の狀態にある事を意味するのである、彼の有名なる澤庵禪師が或時、柳生但馬守に向つて「俺を打てるなら打つて見よ」と云つた、時に但馬守は木刀を取つて和尙に向つたが、一寸の隙もないので打込む事が出來ない、和尙は極めて無頓着な顏をして居たが、其れは偉大なる無頓着で打ち込む隙がないので、遂に但馬守は「參つた」と云つたさうだが、但馬守なればこそ打込まざりしなり、我々であれば構はず打つて、而して失敗する、一點の隙もない和尙も偉いが、打ち込まなかつた但馬守も偉い、但馬守は遂に和尙に就て禪を學んだと云ふ事である、共に天下の名人と云ふべしだ。

全身に精神氣力を充實せしむる事は至難の事である、右手を用ゆる時は左手は空になる、然し是では駄目で、星野九門先生が右手で打たんとする時、左手には精神が充實して居ねば眞の力は籠らぬと云つたが、實に名人の言である、一般の人にあつては一方に精神を用ひて居る時は、他は虛になつて居るのです、思ひ掛けぬ時に人から大喝せられても、修養が十分出來て居る人は、身體に虛がないから平氣であるが、修養の積まない人は虛を突かるゝの

で茫然自失、無能力となる、角力に固くなると云ふ事があるが、是れ一種の氣合負けで、精神が甚しく亢奮すると固くなつて筋肉の運動不自由となり、遂に運動力を失ふ事さへある、我々が實を避け虛を突けば擊劍は勿論人事百般に於て常に一歩を先んずる事が出來る、昔より英雄豪傑が天下の人心を收攬するには常に此の虛實を利用した、卽ち氣合を用ひた、人は精神の反抗心の實を避け虛の方を突く時は、容易に此れを屈服せしむる事が出來る、所謂機先を制するのであつて、全く氣合の術に外ならぬ、總ての談判に就ても此の氣合を用ひれば、多くは成功を見る事が出來る。

機先を制する

相手の意表に出でると言ふ事は、氣合の内で最も有名なる一方法である、我國の英雄中で秀吉程氣合を巧に使つた人は無からう、伊達政宗、毛利等皆此氣合を用ひられたので、常に笑談中に巧に先方を自己の膝下に服せしめた、彼の薩摩を征伐せる時、島津氏の家臣新納武藏守が、主の仇を報ぜんとして秀吉に面會を求め、秀吉を刺し自分も其場に死せんと覺悟を定めた、新納武藏守は當時薩摩で屈指の豪傑であるから、秀吉はよく彼の心中を知りたるも面會を許し、極めて平氣に彼を接見した、尙秀吉は自ら自分の刀の鞘を持ち、柄を彼の方に向け是を汝に與へんと差出した、其儘引き拔いて秀吉を刺すのは容易であるべきであつたが、流石の新納も秀吉の意外の行動に機先を制せられて、其儘平伏して目的を達せずして引き下がつた、而して遂に太閤は別ものだと云つて歸つたとか、是れ全く武藏守の意表に出でゝ機先を制し、所謂虛を突いたのです、是れと同じ事が西鄕南洲翁と刺客人見某との間にも行はれた、斯の如く英雄豪傑は此氣合を種々の事に利用したものである」

秀吉の氣合術

意外の行動

氣合術療法を行ふときは恰も劍客が敵に向ひて、氣合術を應用するときと同樣に、術者は患者に對して氣合術を應用し以て其心身を一變させ重病をも根治せしむるのである

第二章　有心的氣合術と無心的氣合術

東京帝國大學劍道師範木下壽德氏曰く、

無念無想では駄目

無心の氣合が絶對の力

飛鳥を落す氣合術

「氣合には有心的と無心的とある、此の無心の氣合が無念無想と合する劍法は至極なるものであるが之は容易なものではない、又能く人は無念無想と云ふが、只無念無想では何の役にも立つものでない、何故と云ふに無念無想とは空なものであるから、只空では人を斬ることが出來ない、人を斬るには其の空に氣合を合せねばならぬ、是に於てか無心の氣合と云ふものが絶對の力を以て居るのである。

それで無心の氣合と有心の氣合とを明かに說明しなければ普通の劍法家には解せないかも知れないが、元來有心の氣合とは誰にも出來る處の氣合で縱令ば大聲でヤアとかけ或は鋭と云ふが如く滿身の力を込めて精神をある者に移すのである、併しながら此の如くに氣合をかけたとて決してある動物、又は死物が意の如くなるものではない、人はよく氣合をかけて石を動かしたとか天空の飛鳥を落すとかいふが、これは有心の氣合が宛然無心の氣合に變ずるの致す所であつて、人に知れる處の氣合ではないのである、されど有心の氣合と雖も絶對に不必要なりと云ふものではない、如何となれば無心の氣合と雖も有心の氣合より漸次練磨されて而して後に無心の氣合なるものを會得することが出來るからである、只有心の氣合は自ら作る所の氣合であるから其價値や極めて少きものである、と云ふに過ぎない、是に於てか有心の氣合は作るもので無心の氣合は自然に發するものだと云ふことが出來る」と有心の氣合と無心の氣合は如何なるものなるかは、之によりて大略了解せられしことゝ信ず、術者は有心の氣合を無心の氣合に變ずること、自在なる修養を積み、以て其れを療法に應用し重病をも癒し得るのである。

言語を用ひる氣合術と用ひざる氣合術

第三章　暗示的氣合術と心靈的氣合術

氣合術を暗示的氣合と心靈的氣合に區別することを得、暗示的氣合術とは暗示によりて人の精神身體に變動を與へるのである、心靈的氣合術とは無言の儘念力を送ることによりて人の精神身體に突嗟の變動を與ふることである、暗示的氣合術は普通の心理作用を應用して行はるゝもので熟練不

熟練の別はあるも何人にも行はれ得るものである、心靈的氣合術になつてくると精神の靈妙不思議なる作用によりて行はるゝもので、非常なる修養を積んだる人によりて、初めて行はるゝものである、氣合術療法を行はむとする人は、暗示的氣合術は勿論、心靈的氣合術をよく行ひ得る修養を積みて、而して後に之が療法を行ふのが順序である。

第四章　實驗的氣合術と療法的氣合術

不思議な氣合術

氣合術を實驗的と療法的とに區別することを得、爰に實驗的と云ふは氣合術にて病氣を癒し得る根柢を示す實驗をなす場合を云ふ、卽ち氣合術によりて他人の心身を左右する顯著なる實例を示すことを得、被術者の暗示感受性が相當にあれば突然に不思議の現象を顯はすことが出來る、被術者が催眠狀態の第二期に進み得る暗示感受性を持つて居なければ、卽座に不思議の實驗をなすことは出來ない、小兒は思想單純にして感受性高き故小兒には十人が十人皆よく自在に暗示を感應せしむることを得、例へば被術者を

一言の氣合にて歩行を止むる

して室內を歩行せしめ置き、術者突然「イエッ」と一喝すると、足は止まりて棒の如くなりて歩む能はずと云ひ置き、被術者歩行中に術者が突然「イエッ」と云ふと、足は强直して歩めず、術者拍手して「最う歩ける」と言へば歩ける、又被術者に棒を持たせ置き、術者「エイッ」と一聲すると棒はバタリと手より落つ、其場合に被術者大に反抗せんとしても反抗出來ずして氣合の通りとなる、又一聲の氣合によりて輕きものが重くなり、重きものが輕くなる、其他之に類する實驗をなすことを得、此の實驗をば自在に成し得る修養を積みて而して後に療法に着手するのが順序である、療法的氣合術とは氣合術を應用して病氣を癒す法である、次章に之を詳述しませう。

猫の行ふ氣合術

第五章　氣合術療法を行ふ法

氣合術療法を行はんと欲する人は、先づ精神を修養して精神力の充實を圖らなければならぬ、彼の猫を見よ、飯を食うては眠り、食うては眠り、眠つてのみ居る、眠つて居るのは猫が修養をして不動の精神を養ひ居るのである、而

氣合術に必要なる修養法

して若し鼠が出でんか、今迄眠つて居りし猫は電光石火の如く飛び附いて鼠を捕食する之を石火の機と云ふ、諺にも鼠を捕る猫はよく眠ると云ふ茲です人間も終日夫れより夫れへと腦を働かして止まなければ、時に千載一遇とも云ふべき好機に際會することあるも、其機會を逸して後に殘念の事をしたと後悔することがある、猫が鼠を捕ふるは猫が氣合術を鼠にかけたのである、人間も氣合術を行はんと欲せば、先づ精神を修養して精神力の充實を圖らなければならぬ、其法としてはよく眠りよく運動し、深呼吸をなし神佛を祈るにある、而して心身を爽快にし、精神力を充實せしめ置き、強烈なる念力を患者に感應せしめ得る樣に修養しなければならぬ、殊に山川の人なき處に行きて正座し深呼吸をなし、神佛を祈り直立して姿勢を正し下腹部より「エイッ」と猛烈なる掛聲を發することを稽古し練習し置き、愈々修養積みて實驗的の氣合術が容易に行はるゝに至らば治療に着手するのである、而して氣合術療法を行ふには、患者の心を看破してそれに應ずる處置を施すのが最も肝要である、前陳の柳生但馬守に對する澤庵禪師の如く、新納武藏守に對する豐臣秀吉の如く、先づ術者は患者の內心を看破し、其れに應ずる處置を施すことが肝要である、例へば患者がこんなことで己の病氣が癒るものかと思ひ居るとせば、其心を見拔いて之れでは確かに癒ると思はする樣の手段をとるのである、即ち實を避けて虛を突くのである、其手段は如何にせばよいか、之れは多年の經驗に俟つ外道はない、而して治療するには豫め患者の檢診を行ひ、病氣の原因、症候を明かにし、此患者に對しては如何なる方式を採らば全快するかを豫定して後に施術に着手するのである、氣合術療法にては念力又は掛聲によりて、患者の心機を轉換し、病氣は全快せり、又は全快するとの確信を起さしむるのである、然ると心で思ひし通りに肉體は變化するとの理によりて其確信したる通りとなるのである、又治療法としては、諸種の暗示をなすのがよい、先づ其一例を左に述べませう。

氣合術療法を行ふ顯末

先づ患者を座せしめ、或は椅子に凭らしめ、又は平臥せしめて、安樂の位置を保たせ全身の筋を弛めさし閉目せしめ置き、患者に呼吸を少しく荒く深く

熱烈なる掛聲と念力

させ、術者は姿勢を正し直立して下腹部に力を凝め、患者呼氣する一刹那に下腹部より出したる莊嚴の力ある語にて「エイッ」と一聲又は二聲三聲又は四聲をあびせかくるのである、然ると患者の心機は轉換し病身變じて健全體となる、其強烈なる「エイッ」の掛聲に代るに、術者非常に念力を罩めて痛みはとれる病氣は癒ると思念し、以てその念力を患者に感應せしめて癒すのは最もよい、之れ前者は暗示的の氣合術療法にして、後者は心靈的氣合術療法である。治療に際しては何日でも暗示的療法を行ふと共に心靈的療法を行ひ、尚術者は患者に向つて言語暗示を以て、癒つた健全になつたと繰り返して暗示しつゝ患部を輕く撫でるとよい、此療法は聽くと簡單であるが、其練習は頗る至難で、練習をよく積まざれば氣合術療法の效果を擧ぐることは六ヶ敷い、私は此法によりて十六年前より日々多くの患者を治療しつつあり、醫藥效を奏せざりし重病を即座に癒した實例が澤山にあります。

藥石無效の重病癒る

第十二卷　リズム療法

第一章　リズム療法とは何ぞや

宇宙の萬物は皆リズム的の運動をなせり

色はリズムの振動

リズムとは總て物が運動するに當りて、それが一定の調子を以て進行するときは、その調子をリズムと云ふ、而して宇宙萬物皆自然的の運動では常にリズムを有してゐる、物質の最微なるものは原子である、之は在來科學の唱ふる所であつたが、最近の研究によれば、原子を構成するものは電子であつて、これは原子内に於て一秒に四百萬億乃至八百萬億回と云ふ、極めて迅速な速度で一定のリズムを以て回轉してゐる、また吾人が種々の色として感ずる所の光線は、之れ皆エーテルの振動であつて、各色につきそれ〴〵一定のリズムを以て振動してゐる、故に赤は赤青は青と眼に映ずるのである、或は大にしては地球上に於ける潮汐の運動、天體の運動、南北極に於ける地球回轉軸の僅かに數尺といふ變動でさへ、常に一定のリズムを保つてゐる事

注意の強弱もリズムである

は天文學の證明する所である。さう云ふ自然物の現象のみに止まらない、人間の精神上の事でも其通りで、實驗心理學の證明する所に據れば、人間の注意力といふものは、數分を隔てゝ或は昂まり或は低まり、一定のリズムを以て波動を描く、一日を通じて仕事のよく出來る力の狀態を調べて見ると、午前六時頃に起床するとして、次第に作業率が高まり、午前十時より十二時の間に最高潮に達し、それから漸次衰へ、二時頃からまた次第に高まつて、四時六時の間に高潮に達し、それより再び降り阪になつて、八時頃からまた昇り、十時に至つて最高潮に達するのである、これもまた一つのリズムである。

大なるリズムは數百年に一度小なるリズムは一秒間に何萬億回

人間の身體に於ける種々の現象も、自然的にリズムを有す、病氣の經過に於てもさうである、惡くなるにしろ快くなるにしろ、病勢は一張一弛して進んで行く事は醫學上爭ひのない事實である、唯一本調子に進むといふ事はない、普通觀察せられるのは一日二日に亙つた大きなリズムであるが、實際は一日の間に於ても、一時間の間に於ても、小なるリズムは常に存在するので、療法がこのリズムに適應して行けば、その奏效を確實迅速ならしむる、卽ち病勢が快い方に向ふ其れにリズムが力を添へるからである。

術者のリズムにて患者のリズムを左右する

術者の猛烈のリズムを以て患者の衰へしリズムを活潑に動かし、又患者によりてはリズムの活動が非常に惡く爲めに身體を損して居る場合には、術者のリズムにて其れを興奮整調せしめ、健全に復するのである。

リズムを利用する事の利益を證明するに面白い話がある、南北朝時代のこと幾内地方のある寺に非常に大きな釣鐘があつた、或時和尙が人々に向つてその釣鐘を誰か手で押し動かせるものがあるかと訊いた、力自慢の者が我も〳〵と押し試みたがビクとも動かぬ、すると或る智慧者があつて、明日の朝になつたら動かして見せようと約束し、さて其の男は一晩中釣鐘に手を當てゝゐたが、明くる朝になつて人々が來て見ると、果して其の男が釣鐘を諸手で前後に搖るがしてゐたので大に驚いた、これは其の男が一晩中釣鐘に手を當てゝ、一定の時間を隔てゝ力を入れたり弛めたり、卽ちリズム的に力を加へてゐたから、遂にその大きな釣鐘も動き出したので、若し只無茶に押してゐたのであつたら、一晩かゝつても二晩かゝつても、動き出しはし

リズムにて大釣鐘を動かした

ないのである。治療に於てもその通りで、始めは效が顯はれない樣でも、リズム的に熱心に施術してゐると、終に頑固の大病も癒し得ることを忘れてはならない。

リズムの實體

多少重複の嫌ひあるも、リズムの性質を明らかにせんが爲めに、リズム療法の創設者米國哲學博士栗田仙堂氏の說の大要を一言次に紹介せむ。

栗田氏の說く所のリズムは、宇宙の動律で瞬時も停止しない波律狀の活動であつて、宇宙の實體なりと斷定せり、此リズムは宇宙に充滿してゐて、宇宙の絕對意識である、吾々は平生自己の意識を拂ひ除け、此絕對意識を迎へ入れるときは何事でも爲し得ざることはない、古來傳ふる所の靈怪的現象は皆此狀態に於て行はれたのである、此力を病氣の治療に用ふるのが卽ちリズム療法である、宇宙には初めから動律作用がある、其結果として第一に瓦斯體なる一種の凝結的物質を生じ、其れが更に動律作用と交和して順次に別種の瓦斯を生じ、其等の瓦斯は互に牽引し、反撥して其結果火熱を生じ、次いで水素となり、水火交渉の結果萬物を形成せり、而して萬物は其れ〳〵動律に對する感受性が違つてゐる爲めに、動律の變化が生じた譯である、人間の精神は動律の影響を感ずる諸分子の集合統一したもので、平生の精神狀態を自主格的狀態といひ、其狀態より脫して宇宙動律を何等の障碍なく顯現せしむる狀態を他主格的狀態と云ふ此狀態に於ては何等も爲し得ぬ事はない。病氣を癒す位のことは何でもない。

宇宙はリズムに依りて萬物を作る

自主格と他主格

第二章　リズム療法家に必須の精神統一法

暗黑の室內で靜坐深呼吸をする

平生の精神狀態卽ち自主格的狀態をして治療を行ひ得る狀態卽ち他主格的狀態に入る修養法としては、調心法を行ふのである、其練習期間は約一週間とし、最初は午前一時より三時までの間に於て、三十分以上一時間以內專念練習に從事するのである、練習中は電光其他の燈火を消して暗黑とし、正坐して下腹部に力を入れて深呼吸をする、而して兩手を合掌して中指の下部卽ち掌の部分に少しく力を込る、此場合或は全身に動律作用を起して振動し躍動する事がある、其場合は合掌を解き振動止れと意中に命令を發

肉體躍動する

無き光明が見える

千里眼者となる

すると直に留まる、止れば又以前よりは一層輕く合掌する、此振動起らざれば、始めの通りに繼續してよい、兩眼は常に瞑目してゐる、瞑目の儘自己の前方に小さき電燈の如き光明が存在するものと假定し、其光明を見る氣になると、光明は見えて來る、人に依りて相違あれ共、修養一週間にして光明を見るもの多く、此光明を見るに至らば第一期の成功である、其れは精神の統一方法、即ち他主格的狀態に入る練習で、人間は何事をも思はずには居られない、故に其思ひの發生を留め、心を一つに纏むるのである、即ち精神統一の便法として之を行ふのである、第一期の練習に次で、第二期の修養をするのである、即ち次の一週間は第一期と同じき狀態を以て、其光明を見つゝ自己が決せんとする問題を考究するのである、即ち某病人は施術すべきか否か、癒るか否かを考究すると、自然に何等かの感を起す、然らば其判斷通りに行ひて、實地を經驗するのである、其經驗が成功すると、其度に確信を增して、信念は益々鞏固となるのである、第三期即ち次の一週間は順を追ひて更に其法を行ひ修養を積む、と遂に時間空間を超越して過去も未來も隔地の現象も

肉眼で眼前の者を見るが如く明確に知ることを得るに至るもの稀にはある、是れ即ち千里眼である。

第三章　リズム療法を行ふ法

リズム療法を行はんとする前に、術者は精神の統一を圖り自己のリズム力を盛んにせんが爲に神前又は莊嚴なる方向に向つて端座し、兩手は指を互に着けて合掌し、左右中指の直下に少しく力を入れ、深呼吸を五十回する、其法は鼻より空氣を吸ひて吸ひ得る限り吸ひ込み、下腹部に滿身の力を罩むる、斯くして堪へ得られざるときに至つて、鼻より空氣を呼出するのである、然して其呼吸五十回に及ばゝ唱文する、即ち我は宇宙、宇宙は我、我と宇宙とは渾一不二、融然として合體すと默禱すること三回、總ての妄念を去り、瞑目し居りて前方を熟視する心持ちである、と瞑目の裡に前方に光明を認めるに至るものは修養が確かに積みたのである、然らば愈々施術に着手するのである、先づ患者をして成るべく正坐せしめ、術者は約二三尺を距てゝ其の

命令、唱文、熟視、輕撫、額の中央に指頭を觸る、

術者は宇宙の主宰者

修養法と實驗の顛末

前に對坐し、深呼吸を行つて、唱文を心中に誦すること一回、患者をして瞑目せしめ、低聲なれども心力の罩もれる力強き調子にて、次の如く云ふ「余が今神に祈つた故、若し君の病氣が根治するものなれば、余の手が君の患部又は頭部に觸れる、然ると君の病氣は忽ち拭ふが如く全快する、若し不幸にして君の病氣が癒らないものであれば、余の手は君の身體に少しも觸れない」と云ひて、術者は再び深呼吸一回、唱文を心中に誦すること三回、我は宇宙の主宰者である、何物をも支配し得る、絶對權威者である、と觀念し、意氣旺盛となつた時、治る」と心中にて強く觀念し、同時に兩眼を開いて患部を熟視する、熟視中は呼吸をばせない、其際治るとの感が術者の腦裡に閃いたら、手指を以て患部を、輕く摩擦し、更に患者の兩眼の中央と兩眉の中央鼻上に食指の尖を輕く觸れ癒る癒ると心力を凝むるのである。

尙某氏が行ふた修養法と治療法と其結果とを次に申しませう、調心法卽ち腹力呼吸を行ふとき、最も一呼吸にて長かりしは一回に一分時間を費し、一日に三十分時間宛一週間行ふた、然ると丹田の充實したること非常で、下腹部は堅くなり、歩行のとき仕事のときと雖も、充實して居る樣になつた、尙一週間深呼吸を續け、後に實驗を行つた、卽ち合掌して深呼吸を行ひ、腹力を充實して居ると、手指が活潑に顫動したが、極く迅速なりし故、肉眼を以て見、正確に其顫動數を計算することは出來なかつた、次に病人を閉目せしめ、深呼吸を行はせ置き、術者の指頭及び手掌を病人の患部と命宮(鼻の上部)に接觸し、腹力を充實して、暫く思念を凝らしたら、病人の眼瞼リズム形に震動した、又中指と人指との二本の指頭を以て、五六分の距離を隔てゝ、病人の命宮に直射したら、病人はブル〳〵と振動した、又某患者に對して患部に手を當て、丹田にウンと力を入れ、積極的に「强健」「愉快」と默想して居ると、病人の精神は次第に靜まりて熟睡して仕舞つた、覺めた後に聞いたら、氣持がよく極樂で遊んだ思ひがしたと云ふた。然して其病人は健全となつた、又眼病患者が治療を求めたるを以て、今度は默想を行はず、直ちに丹田に力を入れたるまゝ、二本の指を以て三四分を隔てゝ患者の眼に(勿論瞑目せしめ置き)五六回直射した處が、患者は瞑目して居つたが、眼の前で電光が閃く樣な心地がした

治療の效顯著

眼病を癒した

治療の原理

リズムは直接に患部に影響する

と後に云ふた、其れで治療を施し、瞑目を開かしめたるに、二三十分經過すると、大に眼の工合が好くなつたとて喜んだ。

斯の如き療法で病氣の癒りし理由を考ふるに、自己の動律作用を放射し、患者の細胞を波動せしめ、患者の生力的統一の作用を補ひて、全能的に統一せしむるが故に、それの故障となりし部分卽ち澁滯又は缺損の部分たる患部は矯正され、全癒したのである、乍去、術者の精神力が患者の大腦中樞に及びて、初めて作用するのではない、身體構成の要素たる細胞又は其原子が空素に作用せられ、全身に及び生理作用を順調ならしめ、疾患を平癒したのである。と某氏は說明した、此說明が正當であるや否やは學者の研究に委して私の意見は省略する、去り乍ら其療法によりて病人の癒りしことは事實なるを信じます、私の實驗に依つても此某氏の報告と成績は大略一致して居りました。

大正七年十二月二十日印刷
大正七年十二月三十日發行

不許複製

著作兼發行人　東京市芝區琴平町三番地　古屋景晴
印刷人　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　中野鎁太郎
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京市芝區琴平町三番地
精神研究會
電話新橋一八七五番
振替口座東京二三五一番

精神療法研究家必讀珍書

古屋鐵石先生著　上製　八拾錢　並製　五拾錢　送料　八錢

大珍書

秘密獨習　成功確實　女催眠術

口繪　女催眠術家が不思議の實驗をなし居る處の寫眞版數個挿入

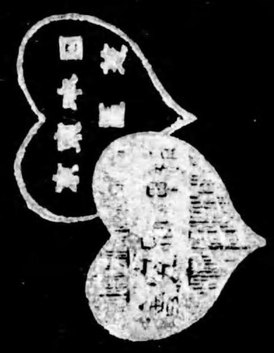
此催眠法は精神療法研究の根抵にして被術者を神道に云ふ神人合一、佛教に云ふ眞如法性、基督教に云ふ見神の狀態となすにあり。

著者多年研究の結果、最近の發見になれる進歩せる催眠術を婦女子と雖も秘密に自宅にて獨習し、催眠術療法を行ひ得る根柢を簡易に秘訣を講述せり、殊に精神的の慰藉と人格の修養とに力を濺ぎ婦女子に關する面白き問題を解說しあり、讀んで面白き事不思議なる事小說以上なり。

（精神療法の根抵）

此書は各種の精神療法の根柢を解けり

No 6
7.77


東京大學
圖書之印

終